

串本海中公園 マリナパビリオン

2005. 3

Vol. 34, No. 2



キントキ

Prionitis ansusta

体は小さな盤状の根から出て下部は円錐状、上部は円柱状か平たくなる。繰り返し二股に分岐して、所々でくびれる。質は軟骨質で硬く、手触りはゴツゴツし、乾燥するとさらに硬くなる。体のあちこちから副出枝と呼ばれる小さな丸い枝が出て、その先端に生殖器が形成される。色は赤褐色で、和名の由来はこの色からである（金時豆等と同じ金太郎＝坂田の金時の肌の色からの命名）。本州中南部から四国・九州まで分布し、串本周辺でもごく普通の種である。水深 5 ～ 20 m 前後の浅い岩礁地帯に多産するので、イセエビの刺し網にもひんぱんに羅網するが、網を絡ませるので漁業者からは嫌われている。写真は古座町津荷の水深 5 m 程の所で撮影したもの。スギノリ目。

S.U.

串本海中公園センター

海中展望塔に集まる魚 (28)

2004年1月~12月

福田 照雄・小寺 昌彦

2004年10月下旬に海中展望塔の連絡橋が台風23号によって破壊され、以後の魚類観察が通常のようにできなくなりました。従って1~10月の通常期を小寺が、また連絡橋破壊後の11, 12月の観察を福田が塔管理のために塔に渡ったときに行いました。

さて、2004年は105日の観察で142種が記録され、前年の最多158種から16種減少しました。月別の出現種数を見ると、1月の74種に始まり、4~9月を80種前後で推移しながら8月に年最多の83種を記録し、10月以降徐々に減少して、12月に62種の年最少となりました。これまでは2月や3月などの最低水温期に年最少となることが多く、12月に最少種数が記録されたのは初めてとなりました。

本年観察された142種のうち、前年との共通種は119種で、前年見られなかったものが23種、うち1種ミナミイソズミが塔初記録となりました。ただし、本種は前年までイソズミと混同していたもので、本当の意味での初記録種ではありません。このように初記録種がない年は、観察26年目で初めてとなりました。

前年に比べて増加が目立ったのがミギマキ、キタマクラ、ロクセンズメダイ、ナガサキズメダイ、シラコダイ、シマアジなどで、ミギ

マキやシラコダイ、シマアジは前年に全く出現しなかった種です。また前年出現し本年見られなかったものは39種ありますが、その中の23種は1回観察されただけの種でした。逆に前年多く見られて本年出現しなかった種はタスキモンガラとミゾレチョウチョウオで、前年の出現率はそれぞれ10%を越えていました。

さて、本年の出現率が80%以上の種は19種で、前年の23種より減少しました。出現率が80%未満になったのはトゲチョウチョウオ、コガシラベラ、テングスジギンボ、ニセカンランハギの4種で、とくにトゲチョウチョウオは前年の87%から51%へと著しく減少しています。上記4種の他にも出現率が減少した種は多く、クギベラやセナスジベラ、サザナミハギなどが前年の半分程度になっています。

2004年は夏に黒潮が離岸し始めて、11月以降の水温が平年より低く推移しました。出現種数は2001年以来最低の142種となり、上記の4種のように熱帯性の種で減少が著しく、また例年9月~12月に多く見られるチョウチョウオ類幼魚やセナスジベラ、アオブダイ類幼魚、サザナミハギのような主に熱帯域に生息する種がこの時期にほとんど(又はまったく)見られませんでした。ただし、本年は度重なる台風とそれに伴う塔周辺環境変化などがあり、これらの減少の要因が本当に黒潮離岸による低水温の影響なのかは分かりません。

和 名	JFMAMJJASOND	日数
ウツボ	—1121—1—	16
ワカウツボ	—1111111—1—	11
トラウツボ	———1——	1
キビナゴ	5342—122332	38
ウルメイワシ	———1——	1
ニシン科の一種	———2——	1
ゴンズイ	———222—1	6
アカエソ	1——112111—	16
ボラ	323323223322	75
ムギイワシ	235543334545	74
トウゴロイワシ類	2243—2334553	58
アカマツカサの一種	—1———	1
ヘラヤガラ	—1—1—11—1—	7
アオヤガラ	1———1——	3
カサゴ	122222112211	57
キリンミノ	———1———	1
ハナミノカサゴ	1—111—1—11	14

和 名	JFMAMJJASOND	日数
オオスジイシモチ	222222112211	69
クロホシイシモチ	—255542——	47
カンパチ	———1——	1
ギンガメアジ	———2—1—	2
マルアジ	———1——	1
シマアジ	—133211——	27
マアジ	———1—1—2——	5
フエダイ	—1—12112221—	32
クロサギ	———22222	30
ヒレグロコショウダイ	1———	5
クロダイ	—11———	3
アカヒメジ	———12221—	18
ホウライヒメジ	21221112222	54
オジサン	1—11——2122	20
ミナミハタンポ	———1——	1
トゲチョウチョウオ	211222221122	53
チョウチョウオ	223344444432	102

和 名	JFMAMJJASOND	日数
ゴマチョウチヨウウオ	-----1-----	1
ニセフウライチヨウチヨウウオ	-----1-1-----	2
チョウハン	-----1-111-----	6
アケボノチヨウチヨウウオ	2-----	4
シラコダイ	-22221-----	27
スミツキトノサマダイ	-----11-----	3
トノサマダイ	1-----11-----	6
フウライチヨウチヨウウオ	1-----1-----	4
ナメラヤッコ	-----11-----	5
サザナミヤッコ	---1-11-----	5
ノトイスズミ	322422323233	90
テンジクイサキ	222221223211	65
ミナミイスズミ*	-----112-12-----	11
イスズミ	1-111-1-21-	9
クロメジナ	335544434343	102
オキナメジナ	11-11-111122	25
メジナ	554555555555	105
タカベ	---1211-----	8
カゴカキダイ	-----1-132222	35
インダイ	-----222-----	18
インガキダイ	---1-11-11-----	8
ホシゴンベ	-111-----	4
ミギマキ	---111221222	42
タカノハダイ	223222222222	96
クマノミ	322222333322	101
アマミスズメダイ	---1-----1121-	12
スズメダイ	-----2-----	3
テンジクスズメダイ	2-122-12321	43
ロクセンスズメダイ	222222111---	54
シマスズメダイ	-----11-----	5
オヤビツチャ	444434333322	100
メガネスズメダイ	21-----	7
ソラスズメダイ	555555555544	105
ナガサキスズメダイ	---1222222211	60
セダカスズメダイ	333333333333	105
コブダイ	11111-----	7
ブチススキベラ	223322222212	90
カンムリベラ	11-1111211---	23
スジベラ	---211-----	7
クギベラ	2111211-----	30
ムナテンベラ	1-12211-----	22
イナズマベラ	-----1-----1	4
キュウセン	---11-----	2
ホンベラ	112322-----	39
ナメラベラ	---1-----1-----	2
シロタスキベラ	---111111-----	13
ホンソメワケベラ	233333322322	102
ノドグロベラ	2111-----	14
アカササノハベラ	333333333333	105
ホシササノハベラ	---11-----	6
アカオビベラ	212221-111---	32
カミナリベラ	443333223222	97
コガシラベラ	333322112111	69
ニシキベラ	333444333222	105
セナスジベラ	221-----	18
ヤンセンニシキベラ	1-----12-----	12
オトメベラ	333333222222	103
ヤマブキベラ	333333333333	105
リュウグウベラ	-----1-----	1

和 名	JFMAMJJASOND	日数
ハゲブダイ	-----111-----	8
ヒブダイ	1-222222211	55
ダイダイブダイ?	21-12232222	46
アオブダイ	11222221-11	53
ニシキブダイ	-----211-----	9
オウムブダイ	1-----1122---	14
ナガブダイ	222222222221	83
オビブダイ	-----11-----	2
アオブダイ類 (幼魚)	22-----2-----	16
ブダイ	333332223322	100
ヘビギンボ	111-1-11-1-	10
ゴマフヘビギンボ	1-----1-111	5
アミメミノカエルウオ	-11-111-----	6
セダカギンボ	---1-----	1
ミノカエルウオの一種	-----1-----	1
ニセクロスジギンボ	-1-----	2
カモハラギンボ	-11221111111	31
ミナミギンボ	2122231-----	46
テンクロスジギンボ	222222221-1	71
クツワハゼ	121111-----1-	18
クロユリハゼ	-----1-----	1
アイゴ	1-1111222221	39
ツノダシ	-1211222321	40
テングハギ	11-22212111	38
ニザダイ	332232343333	103
ヒレナガハギ	-1-----1121-	12
ニセカンランハギ	212232222232	83
スジクロハギ	---1-----1	5
ニジハギ	-----1-----	1
ナガニザ	22-----2221-1	36
モンツキハギ	-----121-----	10
シマハギ	-----1-----	1
クロハギ属の一種	-----11-----	2
サザナミハギ	1-----1-21-	9
アカカマス	---212-1-1-	11
ギマ	---1-----	3
ソウシハギ	1-----	1
メガネウマツラハギ	-----11-----	3
ニシキカワハギ	1-1-1-1-1-	4
カワハギ	---11-11211	13
ウミスズメ	122111-----1-	24
シマウミスズメ	112111111111	41
ミナミハコフグ	-----11-----	4
ハコフグ	222222222222	97
ハナキンチャクフグ	-----11-1-1-	5
キタマクラ	111122222212	54
シマキンチャクフグ	-----1-----	1
インガキフグ	222222222221	78
ハリセンボン	111111212122	39

*は従来の出現種を種名変更したことにより塔での初記録種となったもの

表中の数字は月の出現度

(1 : 少ない、2, 3 : 普通、4, 5 : 多い)

月	J	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D	計
観察日数	10	10	10	9	10	10	10	8	9	5	7	7	105
種 数	74	65	71	78	77	75	82	83	81	73	68	62	142

POLYCHAETOLOGICA (34)

各科の属の検索と種の説明 (19)

サシバゴカイ科 No. 18 内田 紘臣

前回から2対の触手鬚を持つ属をはじめた。前回はそのうち属 *Eteone* と *Hypereteone* とを取り上げたが、その中で、属 *Hypereteone* に属する種が前回紹介した種を含めて2種しかないように書いたが、もう2種 *Hy. otati* Wilson, 1988 と *Hy. tingara* Wilson, 1988 がオーストラリアの砂浜潮間帯と浅海砂底から報告されている。両種とも、前回紹介した *Hy. ornata* に特徴的な背面の斑紋はない。

属 *Mysta* Malmgren, 1865

基本的には *Eteone* と同じであるが、口吻の左右両側に大きな葉状の突起が並ぶことによって別属とされる。それ以外に、本属の種は触手鬚が *Eteone* 各種に比べて長い傾向がある。

属名は原記載に説明がなく、よく分からないが、魚類の *Mystus* と同じく *mystax* 「神秘的な」に由来する可能性が強い。ジェンダーは模式種の語尾から判断でき、女性である。

属の原記載 (Malmgren, 1865) で本属は *Eteone* に似るが、口吻の突起の相違と、触手鬚が長いことが明らかな相違点として認識できる。

模式種はスウェーデンからの *M. barbata* Malmgren, 1865 である。種の学名は「ヒゲのある」の意。本属には10種ほどが知られ、わが国からは *M. ornata* (Grube, 1878) のみが知られていたが、既に行ったようにこの種は前属の種である。その他に、前属の所で記したようにわが国に産する本属の種としてさらにもう1種 *Eteone japonensis* McIntosh, 1901 がある。

E. ornata Grube, 1878 の記載の2年後、Grube (1880) はサシバゴカイ科のレビューの中で、本種について興味ある扱いをしている。すなわち、彼は属 *Eteone* を2つの亜属 *Eteone* と *Mysta* に分割している。それぞれの亜属についての定義は何も書かれていないが、亜属 *Mysta* を認めていることから、彼が Malmgren (1865) の定

義に従ったことは明白である。そして、このレビューの中で、彼自身の記載した *E. ornata* は *E. (Eteone) ornata* とされているのである。原記載には口吻の構造について何も記していないので、本種の模式標本はたぶん口吻を翻出していなかったと思われる。もしそうなら彼は触手鬚の長さで本種の亜属を決めたに違いない。しかし、反対に模式標本が口吻を翻出していたとしても、彼は口吻の観察によって、亜属を決定できたのである。いずれにしても彼の *E. ornata* は口吻両側に鱗状の大きな突起が並ばない口吻をもち、2対の触手鬚は短かったに違いない。それだからこそ彼は自身が2年前に記載した種を、*Mysta* ではなく、*Eteone* の種として扱ったのである。以上のことから、Day の見解の方がはるかに優勢で、Grube が北部日本海から記載したのは亜属 *Hypereteone* の種であることはほとんど確実といえるのである。

筆者の手元には下記の3種の他に、更に1種の標本がある。本種は全身濁黄色で、触手鬚が本属にしては短く、まるで *Eteone* の様で、更に腹触手鬚は異常なほどに太い。属の検索表 No. 3 右図 (Vol. 30: 40) は本種の口吻が伸びたときの図と、下記、*My. maculata* の標本からの図をくっつけたものであり、良くない図である。この太い腹触手鬚を持つ種はその図のように、口吻基部のみに、3対の大きな葉状突起をもち、口吻先端部は背面を向き、開口部の腹側～左右両側に多くの細かな指状突起を備える。

Mysta japonensis (McIntosh, 1901)

生時、虫体背面は血赤色の3本の縦帯があり、背面中央の縦帯は広いが、両側の帯は細い。固定標本では上記の色斑は非常に不鮮明となり、ほとんど消失する。本種の最大の特徴は本属の種としては異常なほどに長い感触手を持つことである (図1)。

本種は1874年、St. John 船長による日本海のドレッジにより得られた1個体の完全な標本によって記載された。この船長とその船についてはよく分からないが、彼は1874年に中国沿岸

の海洋動物を採集し、それを当時の英国で海洋探検学者の第一人者であった G. Jeffreys に送ったようである。彼の採集地点の一部はわが国に含まれ、彼はまた北九州の海岸の潮間帯でも採集を行っている。本種の採集場所は北九州沿岸と考えられ、標本は Jeffreys を經由して、McIntosh のもとに送られている。種の学名の意味は当然「日本の」である。

本種は属 *Eteone* の種として扱われるが、未だ口吻の構造は知られていない。著者の手元には潮岬沖水深 100 m のドレッジで採集した 1 個体があるが、標本は口吻を翻出しておらず、口吻の構造は不明であるが、頭部の形状は本種が属 *Mysta* に属することを示している。

Mysta maculata Treadwell, 1920

固定標本で体前部各節背面に不規則不鮮明な茶色の横帯が出て、それは左右 2 箇所まで弱まるので、あたかも各節に不鮮明な 3 紋があるように見える。感触手も触手鬚も細い棒状である。眼は比較的大きく、暗赤色である。学名の由来となった、背触鬚の内部にある暗色斑は小型の個体では出現せず、疣足を含めた体の幅が 1 mm 以上の大型個体にのみ出現する。ちなみに模式標本の体の幅は 1.5 mm である。未だ生時の観察を行う機会を持っていないので、生時の色彩は不明である。

本種はアメリカのアドバトロス号探検で、フィリピンのスールー諸島水深 24 尋の砂底から採集された 1 個体の標本によって記載された。

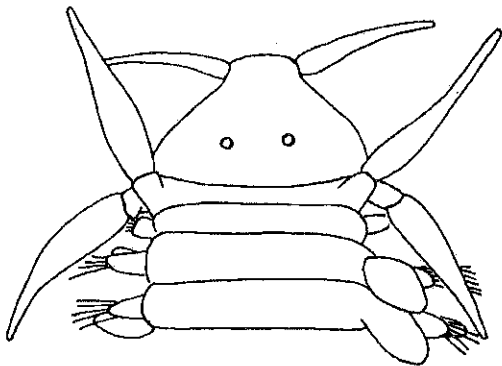


図 1. *Mysta japonensis* の頭部

種の学名は「斑紋のある」の意で、各背触鬚の中央に 1 個ずつある暗色斑紋に由来する。

筆者の手元には紀南の、串本・玉之浦・那智湾の潮間帯～水深 15 m の砂底から採集された標本 9 個体がある。

Mysta ornata sensu Annenkova, 1937

生時、虫体背面は淡オレンジ褐色の 3 本の縦帯があり、背面中央の縦帯は広いが、両側の帯は細い。背面正中線はレモンイエローのすじが走る (図 2)。固定標本では上記の色斑は淡赤紫色に変わるが、ほとんど消えてしまって、背面中央部は広く明黄褐色で、左右に暗緑色の縦帯がある。これらの色彩は虫体表皮より内側の体内の色である。

本種は Annenkova (1937) が北日本海のピョートル大帝湾水深 18-20 m から記録した 2 個体の *Eteone* (*Mysta*) *ornata* と同種と考えられる。色彩と形態が一致するからである。このアンネンコワ女史の同定はそれ以後ロシアのみならず、大概の支持を得て、本種が *M. ornata* (Grube, 1878) と考えられてきたが、上記の通り Grube の種は *Eteone* (*Hypereteone*) の種と考えられる。アンネンコワの記録以後、本種は *Eteone* (*Mysta*) *ornata* の学名で度々出現するが、その大部分は女史採集の標本によったもののようで、これがほぼ唯一の記録である。

筆者の手元には潮岬沖水深 300 m のドレッジで採集した 1 個体がある。写真はこの個体のものである。

これでサシバゴカイ科を終了する。

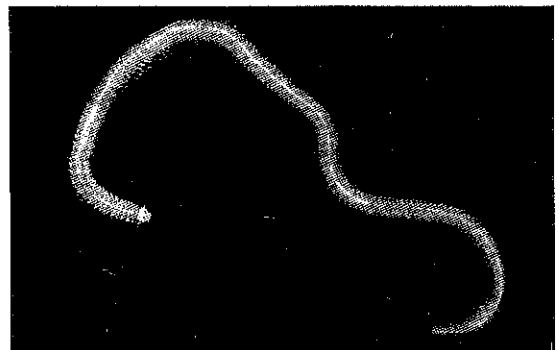


図 2. *Mysta ornata* sensu auct. の生時の写真

特別展「もう一つの熊野古道 大辺路に行く」より
大辺路の民話「鯨のお礼」夜話
宇井 晋介

今回の特別展は大辺路沿いに伝わる海の民話から材題をとってある。その中でもこの海中公園のある地にまつわる話は特に興味深い。

海中公園の立つところは稲村崎というが、ここに「鯨のお礼」という民話が伝わる。あらすじはこうである。昔、稲村崎の近くの有田村に房吉という子供がおった。ある日房吉が浜に出ると鯨の子供が磯に打ち上げられて死にそうになっていた。房吉は可哀想に思っこの鯨を逃がしてやった。ある日のこと、房吉がまた浜に出ていると、沖の方からこの前の子鯨が母鯨とともにやってきた。母鯨は房吉の目の前まで泳ぎ寄ると、子供を助けてくれたお礼にと、房吉を背中に乗せるとすごい勢いで海を泳ぎ出した。やがて鯨は遠い遠い異国の海岸に着いた。房吉が上陸したところは見たこともない様な大きな木がそびえ立つ森で、そこで房吉は森の神様から1本の太木をもらい、その木にまたがって再び村に帰ってきた。房吉が死んだと思っていた村人は大騒ぎ。早速その木を飢饉の時にお世話になったお金持ちの家に贈り、お金持ちはその木1本だけで一軒の家を建てた。

これは浦島太郎の話にも似た「恩返し」の話である。動物が人間に恩返しをする話は日本だけでなく世界中にたくさんあり、鶴が恩返しをする有名な「鶴女房」や「舌切りスズメ」などがすぐ頭に思い浮かぶが、柳田国男はこの類の話を動物報恩の話として分類している。報恩説話の場合、恩返しの内容は、人間に変身して結婚し男を幸せにしようとする「異類結婚」の場合と、黄金や宝物をもたらして助けた人を裕福にする「致富譚」の場合に大別できるとされるが、それからするとこの民話はどうかやら後者に当たるようだ。しかしお礼が黄金や宝物ではなく「ただの木」というところが何とも変わっている。それもそのはず、実はこの話は実話を元に作られたものなのである。そしてこの「木」

で建てられた家が今もちゃんと実在している。この話の実話は以下の通りである。明治の初め頃、漁師が見たこともない巨大な流木が稲村の浜に打ち上がっているのを発見した。そこで漁師はその木をある人物に寄進することを思い立つ。それは何度かの飢饉の際に自分の蔵を開いて村人を助けてくれた資産家であった。ところが太さも長さも破格な木である。長い海の旅で吸った塩分を抜く為に大きな風呂桶を作り、堺の鍛冶屋に特注の巨大なノコギリまで作らせたというから、それこそおとぎ話を地でいく様な大騒ぎである。それでできたのが今に伝わる家でその名も「稲村亭（とうそんてい）」という。この家の大きな部屋がそっくりこの1本の木からできている。部屋の柱や梁だけでなく、建具や机果ては煙草盆まで全て1本の木できているのは恐れ入る。材質は緻密で杉に似るが、色は日本の木にはあまり見られない赤褐色。専門家に鑑定してもらったところ、カリフォルニア沿岸に生えるレッドウッド（セコイヤ）ではないかと結論された。高さ100m以上にもなる巨木である。なるほど大きいのも無理はない。この辺りは黒潮が直接岸を洗い、海岸には世界中あらゆるところからやって来た漂流物が打ち上げられる。130年前アメリカから遙々流されてきて打ち上げられた巨木が、クジラと結びついてこの民話が作られたのであろう。ではなぜクジラなのか。クジラは最近では捕鯨が国際問題になるほど数の減ってしまった動物であるが、明治の初め頃はまだまだ豊富な資源であった。この串本にも大きなクジラの加工場があり、毎日の様にクジラが水揚げされていた。海岸からいつでも沖合を通るクジラの潮吹きが見られたと言う。今ではそのような光景は想像することさえも難しいが、当時はこの大辺路沿いの集落ではクジラはごくごくありふれた動物だったのであろう。民話はそれぞれの人々の日常から生まれてくる話である。それからすると、この話は当時のこの地でしか生まれえなかった話であり、寂しい事だがこれから後の時代では決して生まれない話であらう。

フサヘリイソギンチャク串本に産する 内田 紘臣

これまで沖縄島以南からしか記録がなかった *Heteranthus verruculatus* Klunzinger, 1877 フサヘリイソギンチャクが串本町錆浦の海中公園前で記録されたので紹介する。

本種の模式産地は紅海で、原記載以後グレートバリアーリーフ、ハワイと日本から記録があるのみ。わが国からの初記録は内田 (1989) 沖縄海中生物図鑑. 11 巻で、ここで和名が提唱さ



れた。著者の手元にある標本の産地は沖縄島の本部半島と、八重山黒島、石垣島明石であり、今回の記録は本州初記録となる。

2004 年 12 月 4 日に串本海中公園のグラスボート港の中で 1 個体採集された。当初グビジンイソギンチャクと思われ、水槽に展示されていたものである。色彩は西村三郎「原色検索日本海岸動物図鑑 I (1992)」Pl. 32 Fig. 5 のものとまったく同じである。和名の元ともなった体壁上端の房状の突起 (写真右) が本種の特長である。



初再捕された当館産アオウミガメ 宮脇 逸朗

当館では 2001 年より飼育下で繁殖したアオウミガメの子ガメを標識放流している。この試みは本来が植物食であるアオウミガメが人工飼育下において魚類や甲殻類中心の餌で育成された場合、放流後野生に適應できるかどうかを探ることを目的の一つとしている。本放流ではこれまで 35 頭を放流しているが、その内の 1 頭が昨年末に初めて捕まった。

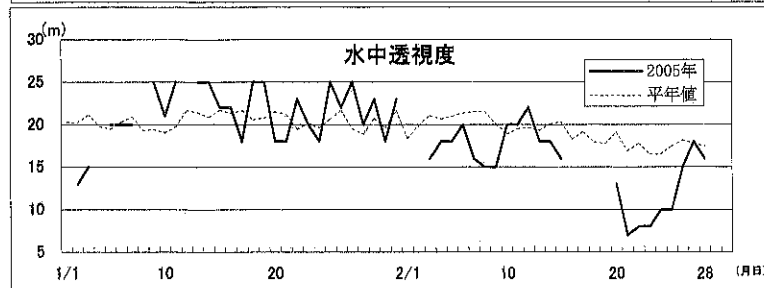
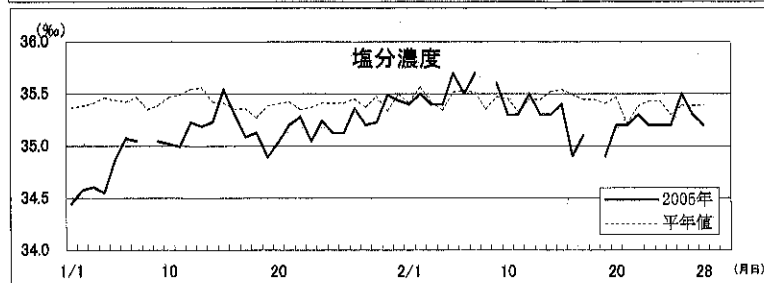
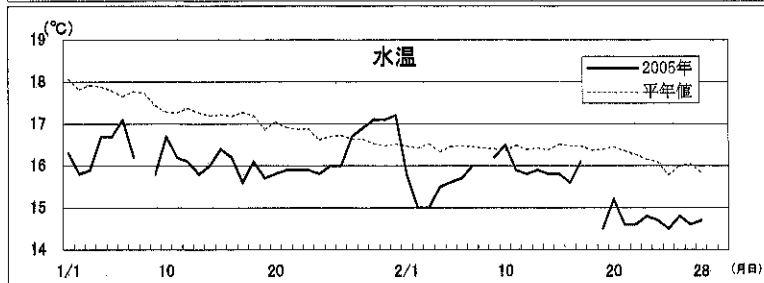
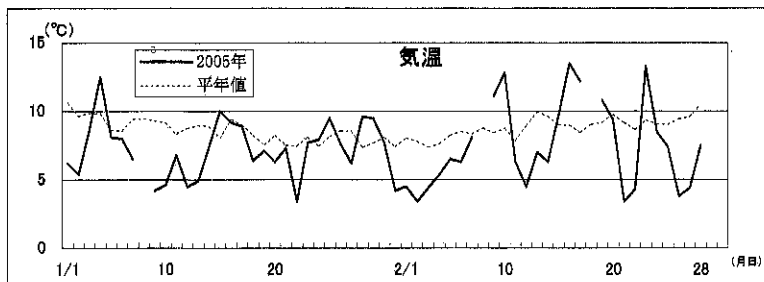
今回再捕されたのは 2001 年 9 月に誕生した 1 頭で、放流は約 22 ヶ月間の水槽飼育を経た後の 2003 年 7 月 27 日に地元串本町の大島海域より行っている。この個体が 2004 年 12 月 2 日に放流地と同じ町内の田並沖で、メジナ釣りの釣り針にかかり生きたままの状態で見つかった。放流後 494 日目に捕まったこの個体は再捕当日には活発な動きが見られ、体形でも痩せて

いると言った様子は感じ取れなかった。ちなみに再捕時の直最小甲長値は 44.0 cm で、放流時の 39.9 cm より 4.1 cm の増加が見られた。

再捕個体は、釣り針が確認されないまま再放流された。特に今回の再捕が釣り具であったことに注目すると、飼育期間中に与えた動物性餌料との関連が考えられ、人工飼育の影響として当館の個体が野生においても釣り餌を積極的に食べている可能性が考えられる。今回の個体からも推論されることだが、釣り針が仮に体内に残っていたならば健康を害し最悪の場合には斃死することも十分考えられるのである。同様の釣り道具での捕獲は天然個体でも稀にあるので、一概に人工飼育の影響と決めつけることができないが、ともあれ今回個体の胃内容物からは少量ではあるものの海藻片が見いだされており、人工飼育下において動物食中心で育成された個体が野生に適應できる可能性を示した点で意義深い結果が得られたのである。

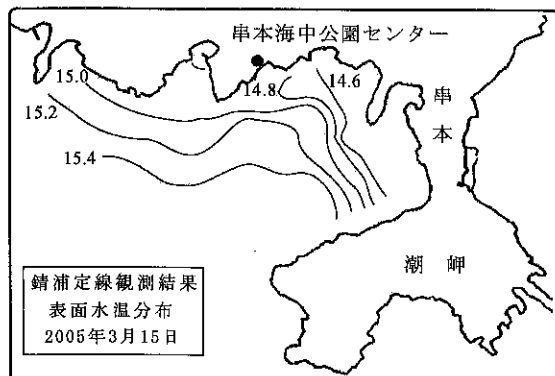
鯖浦の海から
宇井 晋介

平均値	1月	気温 7.2℃	水温16.3℃	塩分濃度35.1‰	水中透視度21.3m
	2月	気温 7.5℃	水温15.4℃	塩分濃度35.3‰	水中透視度15.1m



注) 今号の観測結果に関しては前号の本文を参照のこと

黒潮が昨年8月沖合に去って、初めての冬が来た。案の定、年明けから水温は降下し、2月には14度台が1週間以上続いた。泳いでみるとクシハダミドリイシの群落のあちこちが死んで茶色い藍藻が生え、岩の隙間にはタカラガイの死殻が幾つも転がっている。魚も極端に少ない。黒潮大蛇行は1953年以降6回ほど発生し、最後の発生は1989～1991年にかけてとされている。しかし、当館での水温記録を見てみると2000年も極低水温の年であり、流路を見ると黒潮は大きく沖に蛇行している。ところが、この時の蛇行は数ヶ月程度の短い蛇行であり、遠州灘沖の冷水塊の渦の発生も安定していなかったもので、大蛇行とは認められていないようだ。これからすると大蛇行=低水温という図式は言葉上は成り立ちにくい。いずれにしてもこの蛇行は少なくとも夏位までは続く予想という。昨年の台風で落下した海中展望塔への連絡橋の工事もやっと終わり、さあこれからと言うときにこれでは力が抜ける。黒潮も早いところ復帰してもらって、この海に元気の出るカンフル注射をうって欲しいものである。



マリンパピリオン Vol.34, No.2 通巻380号

年6回発行 一部100円
(年間購読料1,000円/送料含む)
発行日 平成17年3月31日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
(株) 串本海中公園センター
電話 & FAX 0735-62-4875
ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>
印刷所 坂本印刷